The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中国見聞録
Author(s)	生島, 正光
Citation	makoto. 1979, 28, p. 8-10
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86119
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国見聞録

財団法人 阪大微生物病研究会
生島正光

去る五月、筆者は中国友好訪中団の一人として、北京を中心に大同、太原、石家荘と廻ってきた。それは二週間の旅行であった。

「北京」北京は、人口七百万を擁し、その面積は、千葉県を二つ合せた位という。北京の中心は、ご存知「天安門広場」である。ここは、約四十万の人が集まれるというし、詰め方によっては、その倍ぐらい集ることができるというから、日本人の広さの感覚をもってしては表現できない。その後に「故宮」がある。「故宮」は、明、清時代の皇宮である。ここも日本の「御所」と比較されるが、故宮は七十二万平方米に対し、御所は七万平方米というから、これも比較にならない。北京は古都でもあるが、筆者は古都・北京もさることながら、現在の北京を見たく、先ず考えたのは壁新聞であった。北京なら何処でも壁新聞がある訳でもなかろうに、と思っていたら幸い、壁新聞のもっとも多く出ている場所を書いた地図があったので、その写しをもって見に行った。しかし、近づくと一寸様子が違うので、よく見ると、それは壁新聞ではなく、壁写真であった。写真は、すべて「中越戦争」の烈しい戦闘場面であった。壁新聞は何も民衆側の声だけではなく、その筋からのアピールもあるということだ。吾々の宿舎は、北京飯店であったが、この北京第一のホテルの隣に「人民日報社」があり、早速新聞を一部求めた。新聞は六頁の薄っぺらなものである。日本の新聞なら夕刊でも八頁はある。しかし、内容はさすが社会面的記事に広告は一切ない。その購読方はというと、新聞社に三か月の講読料を先納すると郵送してくれる。郵送であるから地域によっては、三日遅れの新聞となる。いらいらする人は、新聞より壁新聞に突っ走るのも分らぬではない。

「万里の長城」万里の長城は、いつ頃誰がつくったかということだが、普通言われているのは「秦の始皇帝」（BC・二〇七）となっている。実際は始皇帝以前から、ばらばらであったが長城的なものがあり、始皇帝が、これをつなぎ合せ、現代に近いものをつくったので、その創始者とされている。しかし現在は、磚（大型の黒色レンガ）でつくられ、約百米毎に墩台（見張番の詰所）があるという姿は、明の時代（一三六八―一六六一）で完成したというから、そう遠い昔ではない。それでは、何んのためにというと誰もはっきりとは答えられない。ただ考えられることは、外敵への防塞ということだが、それなら漢民族は、この長城があったため、永年安泰を続け得られたかというと、そんな歴史的事実はない。とすれば、ときの権力者の権力誇示と、外敵への威圧程度のものでしかない。ただ戦争のない時代に、北方民族と交易するため、この長城を拠点として、目印として取引きをやったという程度の効用はあったようだ。最近、作家の「陳舜臣氏」が「北京の旅」という本を書いているが、この本にマルコ・ポーロが「東方見聞録」に長城について一言も触れていないのはどういうことか、マルコ・ポーロは長城のあたりを歩いている筈なのにと書いている。歴史的な著作にも、落ちこぼれはあるようだ。その段長城は、月から地球を写した写真に、地球上で写っている唯一の構築物であるというから、近代科学には、落ちこぼれはないようだ。世界の文明史の中で、分ったようで分らない正体を揶揄されているのは、エジプトのピラミットと、中国の長城であ

る。とにかく存在理由のはっきりしない、とてつもない構築物だ。この長城にまつわる民話や民謡が多く残っている。何れも長城にかり出され、苦役を強いられた多くの人々の哀話であり哀歌である。

「鬼骨哭いて、啾々たり」

「仏寺」吾々は、この旅行中、いくつかの古寺を拝観した。何れも一千年以上の歴史をもつ有名な古寺である。中国は共産主義の国ではあるが、中国憲法は、信教の自由は認めている。しかし、社会主義国家の宗教政策は複雑で、中国でも法燈は完全に消えていないが、ともかくかぼそい一縷の光は続いている。吾々の拝観した古寺の大部分は、現在では単に文化財的存在としてのみあるが、それでも二カ寺には専属の僧侶がいて、仏事を営んでいた。これらの僧侶も、外に出て布教活動はしていないようだ。また、ある寺では堂宇が傷んだので、大々的な修理を行っていた。そこで、その修理費は何処から出ているのか聞いたら国務院、すなわち国から出ているとのことだ。どうも、この辺のところが分ったようで分らない。もっと深く聞きたかったが、答えてくれる方も曖昧なので諦めた。

「雲崗の石窟」雲崗の石窟は、大同市の西方十五粁のところにあり、ここは武州山の砂岩壁を切り開いて、約一粁にわたり五十三の石窟をつくっている。その中に、大きいのは十七米から、小さいのは壁面仏の数糎に至るまで、約五万一千体の仏像が、坐、立、半跏思と、いろいろな形である。この石窟は前からよく知られてはいたが、現在「全国重点文物保护单位（日本では国宝）に指定（一九六一・三・四）されてから、とくに有名になった。この石窟がつくられたのは、北魏（四五〇）の時代、高僧・曇曜（どんよう）によって始まるという。インド仏教美術は、シルクロードを伝わり、敦煌で花が咲き、石仏は雲崗で実を結ぶ。この石仏は、インド仏の姿である。ところが後年つくられた龍門の石窟内の仏像は、印度仏を脱皮し、中国仏の姿を見せ始めているということだが、筆者は両方を比較して見ていないので分らない。

「明の十三陵」明の十三陵は、北京から五十粁の地にあり、その贅を盡くした墓陵は、世界でも有名である。これは明朝（一三六八ー一六四四）の第三皇帝から、十六代皇帝にいたるまでの墓陵である。墓陵といっても、地上は宮殿風の建物であり、その地下は柩や副葬品を納めた地下墓陵となっている。この墓陵群のある地区に入る前に、参道があり、この参道に石獣二十四個、石人十二体が並べてある。これは、中国の風景写真によく出てくるので、ご承知の方もあろう。この内、十三人目の皇帝を葬った「定陵」が最近発掘され、一般に公開されている。ここに入ると、地下は三層に分れ、それぞれ石造りの大ホールになっている。この部屋の門は、一枚板の漢白玉石という石でつくられ、重さは四噸もあるという。その上の梁は銅でつくられ、これもまた十噸の重さがある。こんなべらぼうな墓室に驚ろいていると、一枚の看板が目についた。その看板に「この墓陵をつくるのに、百万両銀が費された。これを米に換算すると、百万人の人間が、六年間食える量である」と書かれてある。これを読んでいると、いかに莫大な金がかかったかを誇示するというより、いかに馬鹿な金が費されたかを意味するようにとれる。

「崗南ダム」石家荘市内から、約八十粁離れたところにダムがある。このダムは、子牙川という河がよく氾濫して沿岸が洪水に見舞われるので、つくったという。このダムの提防に立って驚ろいた。これはダムというより湖というべきだ。このダムは水流調整のためつくられたので、発電装置はあるが、平素は使っていない。最近の日本は、石油不足で電力事情の悪化が予想されていることからみれば、実にもったいない話である。このダムは、一九五八年に着工し、一九六二年に完成したというから、ぞう古いダムではない。しかし、このダムをつくるのに、近代的な土木工事法でやったのではなく、総て人力でやったという。このため一日八万人の人間が動員されたとか。さすが万里の長城をつくったお国柄ではある。

「日本語熱」今、中国は日本語を熱心に勉強している。吾々は、大同市にある中学校を参観したが、そこでは日本語を勉強していた。学校では必須科目として外国語を教えているが、外国語は、日本語と英語であると教えてくれた。また吾々を案内、通訳してくれたのは、国務院の中にある国際旅行社から派遣された人たちで、終始ついてくれたのは二名であったが、太原市では五名もきてくれた。わずか二十二名の吾々グループにいささか多過ぎるように思えたが、この人達は何れも北京大学、天津大学という名門大学で日本語を修得した若者であった。吾々が教育者クラブというグループ名をつけていたので、仕事半分、勉強半分でできたようだそれだけに色々なことを質問してきた。おかげで吾々は助かったし、彼等も勉強になったことと思う。やがてこれらのエリート達は、次の時代の中国の指導者になることであろうが、彼等は熱心に日本語を通じ、日本を知ろうとしている。これは別の話になるが、石家荘にある中国でも代表的な紡績工場を見学したとき、工場の正面玄関横に写真の大きな掲示場があり、そこに鄧小平副主席の日本への友好訪問の写真が、ずらりと並べてあった。ここにも今の中国が、日本に向けている目の方向が伺えた。

中国を旅行するとき、現代の中国漢字の略字を勉強しておかないと、理解し難い場面に出くわすことがある。例えば厂は歴の略ではない。厂は廠（工場）の略である。また华は貨の略ではない。华は華の略である。华主席は華主席という具合である。

日本語流の略で読もうとしても読めない場合がある。

中国を廻って思い出されることの一つに、中国はスローガンの国であるということだ。そこに家がある限り、壁がある限り、町であろうと、山間僻地であろうと、スローガンが書かれてある。驚ろいたのは山の奥で、山肌に石をはめ込んでスローガンが書かれてある。書れてあるのは、毛主席の意を体し、増産にはげもうとか、工業は大寨に学べ、農業は大寨に学べとか、いろいろあるが、最近はこの辺のところが多少色あせてきて、四つの近代化が巾をきかせ始めている。

省みて、中国の文化は、日本から見れば有史以前に実を結び、素晴しい文化遺産を残している。しかし、奥地に行くと、いまだに非文化的生活をしている人が数多くいる。中国での数千年を経った今日にみる文明史は一体何んであったのであろうか。ともかく、その裾野の広さは、唯々驚ろくばかりである。